

研究ノート

戦後初期大学入試における進学適性検査の「練習効果」に対する認識

一言説主体の立場性に着目して

石岡 学

本研究は、1947～54年度に日本の大学入試において実施されていた進学適性検査に焦点を当て、検査の「練習効果」に関する言説を分析するものである。先行研究では、進学適性検査は「努力主義」に背馳するその性質ゆえに日本社会では受容されなかったと指摘されてきた。しかし、このような捉え方では、当時の雑誌や書籍において多数出されていた「進学適性検査受験対策」の存在を説明することができない。本研究では、言説主体の立場性の違いを分析の軸とすることで、進学適性検査の「練習効果」がどのように認識されていたのかを明らかにすることを課題としたい。

1. 問題関心と本研究の課題

1.1 「入試をめぐる言説史」研究の意義

近代日本社会において、入試ほど継続的に社会的な議論の対象とされてきたものはない。たしかに、「受験地獄」「受験戦争」といった言葉自体はもはや死語の感もあるが、だからといって入試をめぐる問題が消滅したわけではない。現に、これまでの入試が知識偏重であったという認識（事実認識としての当否はさておき）に基づき、2020年度には大がかりな大学入試改革が行われる予定となっている。そして、その実現可能性や困難性についての議論もすでに少なからず提出されている。

入試がこれほど社会的な注目を集めることの根幹には、近代社会における社会的地位配分原理、すなわち「能力主義」がある。このテーゼの正当性を担保するうえで重要な機能を持つものの一つが学歴であるが、日本社会においては近現代を通じ、卒業よりも入学の時点が学歴獲得をめぐるより厳しい選抜の局面として設定されてきた。だからこそ、入試が社会的選抜の最重要局面であり続けてきたのである。

しかし、入試による選抜が重要視されてきたことは、その正当性に何らの疑問も持たれなかったということの意味しない。入試が常に議論の対象

となってきたということは、入試が常に批判にさらされてきたということでもあるからだ。実際、近代日本における入試の歴史は、すでに1961（昭和36）年の段階で「建設と崩壊の循環」（増田・徳山・斎藤、1961、p.30）と表現されるほど、数々の紆余曲折を経てきた。とはいえ、その紆余曲折の内実には、ある一定のパターンが見いだせる。中心視されてきたのはあくまで「ペーパーテストによる一斉記述試験」であり、それに対するさまざまなアンチテーゼ（内申書重視など）が試みられては逆にそれに対する批判が噴出し、結局は一斉記述試験に立ち戻る、というパターンである¹。竹内洋（1988）は、こうした近代日本における入試改革政策のありようを、一回転して元に戻るという意味を込めて「リボルビング・ドア・ポリシー」と揶揄的に表現している。

このように繰り返されるパターンの深層には、日本社会における能力の捉え方の特徴が伏在していると考えられる。この問題を明らかにすることは、日本社会における社会的地位配分の正当性の

¹ 現在では推薦・AO入試などを経て進学する学生の割合は4割を超えているが、一斉記述試験が中心視されている状況は継続していると考えてよい。そのことは、一斉記述試験による入試が「一般入試」と呼ばれることに端的に示されている。

内実を解明するうえで、必要不可欠な課題であるといえる。筆者はこうした問題関心から「近代日本における入試言説史」を構想し、すでに1920年代の中等学校入試改革を対象とした論文を発表している(石岡、2014)。本研究はこの研究構想の一環として位置づくものである。

1.2 「進学適性検査(進適)」に着目する意味

本研究で具体的に対象として取り上げたいのは、1947-54(昭和22-29)年度に大学入試において行われた「進学適性検査」である(なお、進学適性検査は当時しばしば「進適」と略称されていた。本稿でも以下、「進適」と略記する)²。進適がどのようなものであったのかの詳細は次章にゆずることとして、ここではまず進適に着目する理由について述べておきたい。

第一に、そもそも進適を直接の対象とした社会学的研究がほとんど存在しないということである。進適に関する先行研究は、通史における概説的な記述や(佐々木、1989)(木村、2014)、心理学の視点から検査の妥当性検証や実施・廃止(正確には「一斉実施の廃止」)の経緯を述べたものが主で(国立教育研究所、1960など)、社会学的研究でまとめたものとしては、腰越滋の研究(1993、1996)が挙げられるくらいである。その腰越の研究(1993)では、当時の新聞・雑誌記事の分析を通して、進適の存廃論議は主に素質(適性)の存在を認めるか否かという点をめぐる対立であったことを明らかにしている。そして、廃止論を下支えしていたのは素質の存在を認めず努力によって変化する「能力」を評価すべきとする「努力主義」であり、それこそは日本社会における階層組織化の規範の一つであると指摘している。

しかし、努力主義と相容れなかったため廃止されたという腰越の指摘には、疑問の余地がある。これが、進適に着目する第二の理由である。というのも、進適に関する当時の書籍・雑誌記事の中には、「進適受験対策」といった趣のものが少なからず存在したからである。「努力しても無意味なもの」に対して、なぜそれほど多くの「対策」が出されていたのか。その「対策」とは具体的にどういうものだったのか。そして、はたして本当に進適は「努力しても無意味なもの」と考えられ

ていたのだろうか。これらの疑問が明らかにされなければ、進適の導入と廃止という事象の全体像とその歴史的・社会的意味を理解することはできない。

1.3 本研究の課題

本研究では、上述の問題を解明するための第1段階として、進適の「練習効果」に関する言説を読み解いていくことを課題とする。この「練習効果」は進適をめぐる議論での頻出タームであったが、必ずしも明確な定義のもとで使用されていたわけではない。本研究では、「問題を解く練習を繰り返すことで明確に得点が上昇すること」というほどの意味としておきたい。分析対象とする資料は、国立国会図書館サーチ(NDL Search)および国立情報学研究所論文ナビゲータ(CiNii)にて「進学適性検査」「進適」で検索しヒットした関連書籍および雑誌記事のうち、1947-54年の期間に刊行されたもの計72点である³(表①②③)。ただし、重複は除く)。分析にあたっては、執筆者・発言者の立場性の違い(文部省、心理学研究者、受験産業、受験生など)を軸として、「練習効果」に対する認識の差異を明らかにしていくこととしたい。

2. 進適とはどのようなものだったか

2.1 進適の概要

本章では、先行研究に依りつつ、進適の内容およびその導入・廃止の経緯等について、基本情報をおさえておくこととしたい。

進適の導入は、GHQの一部局であったCIE(民間情報教育局)からの要請が契機であったとされる。GHQはそれまでの日本における大学入試を「非民主的」と見なし、米国で従来から採用されていたSAT(Scholastic Aptitude Test)の応用として、日本においても入試に適性検査を導入することを求めた。CIE所属のエドミントン博士が「日本に於ける上級学校入学者の選抜方法」(1949年2月7日)にて掲げた指針(「エドミントンの三原則」)によれば、入試においては受験者の過去・現在・将来の能力を総合的に評価すべきであり、進適は将来の能力、いわば「伸びしろ」を測定するためのものとして位置づけられていた(増田・

² 1947(昭和22)年度のみ「高級知能検査」の名称で行われた。

³ 実際の検索結果はこれよりも多いが、本研究の問題関心と直接関わりのない記事は除外した。

表①：NDL Search における「進学適性検査」検索結果より、本研究で対象とした資料

| 記事・論文・書籍タイトル | 編著者 | 掲載書籍・雑誌名 | 巻号 | 発行年月 | 発行所 |
|----------------------------|----------------|------------|-------|---------|-----------|
| 進学適性検査の解説 | 安藤公平 | | | 1948 | 旺文社 |
| 進学適性検査法の実際 | 小熊虎之助 | 現代心理学の実際 | | 1949 | 北光書房 |
| 智能検査の意義と方法 | 赤井米吉 | | | 1949 | 理科教育振興会 |
| 進学適性検査 | 丸山久我雄 | | | 1949 | 向上社 |
| 進学適性検査のヒントと解法 | 豊田浩七 | | | 1949 | 山海堂 |
| 新制大学入試進学適性検査の傾向と対策 昭和25年度版 | 根本峰好 | | | 1949 | 旺文社 |
| 高等学校入試試験準備書 | 入試問題研究会 | | | 1950 | フェニックス書院 |
| 新制大学入試進学適性検査の傾向と対策 昭和26年度版 | 根本峰好 | | | 1950 | 旺文社 |
| 進学適性検査問題の研究(一) | 編集部 | 学生 | 35-4 | 1950.7 | 研究社 |
| 受験必須進学適性検査 昭和27年度版 | 学窓指導部 | | | 1951 | 山海堂 |
| 大学入試進学適性検査の受け方と正しい答え方 | 田崎仁 | | | 1951 | 大修館書店 |
| 大学入試進学適性検査の傾向と対策 昭和27年度版 | 根本峰好 | | | 1951 | 旺文社 |
| 先輩大いに秘訣を語る 座談会 進学適性検査迫る | 宇井康雄ほか | 学生 | 35-11 | 1951.2 | 研究社 |
| 本年度進学適性検査問題を顧みて | 進学適性検査試験委員 | 学生 | 35-13 | 1951.4 | 研究社 |
| 進学適性検査受験の対策と問題の研究 | | 受験と学生 | 36-2 | 1951.6 | 研究社 |
| 進学適性検査実施要項について | | 教育委員会月報 | 3-5 | 1951.8 | 第一法規 |
| 進学適性検査問題の考究 | 編集部 | 学燈 | 4-10 | 1951.10 | 学燈社 |
| 進学適性検査の探究 | 編集部 | 学燈 | 4-11 | 1951.11 | 学燈社 |
| 進学適性検査への心構え | 編集部 | 学燈 | 5-1 | 1952.1 | 学燈社 |
| 大学受験適性検査 | 茂庭鉄夫 | | | 1952 | 岩崎書店 |
| 進学適性検査の研究 増補 | 豊田浩七 | | | 1952 | 山海堂 |
| 大学入試進路問題解剖 | 東京新制大学進学指導委員会 | | | 1952 | 山文社 |
| 進学適性検査の解説と模擬試験 | 進学適性検査研究会 | | | 1952 | 金子書房 |
| 進学適性検査の要領:その構成と受検法 | 日本応用心理学会テスト調査部 | | | 1952 | 白亜書房 |
| 高校受験のための進学適性検査 | 中村弘道(東大教授) | | | 1952 | 白亜書房 |
| 官・公・私立大学進学適性検査の研究と対策 | 桐村信雄(千葉工大教授) | | | 1952 | 広文館 |
| 進学適性検査と高等学校入学案内 | 旺文社 | | | 1952 | 旺文社 |
| 進学適性検査の傾向と対策 昭和28年版 | 根本峰好 | | | 1952 | 旺文社 |
| 進学適性検査の受け方と正しい答え方 昭和28年度版 | 田崎仁 | | | 1952 | 大修館書店 |
| 進学適性検査の急所と秘訣 | 精神検査研究会 | | | 1952 | 三友書房 |
| 進学適性検査を受験して | 内藤親侯 | 弁論 | 44 | 1952.3 | 信友社 |
| 進学適性検査の探究 | 編集部 | 学燈 | 5-8 | 1952.8 | 学燈社 |
| 特集 進学適性検査の直前対策 | 編集部 | 学燈 | 5-12 | 1952.12 | 学燈社 |
| 進学適性検査問題集 | 測定と指導の会 | | | 1953 | 白亜書房 |
| 進学適性検査(続有恒) | 日本応用心理学会 | 心理学講座第9巻 | | 1953 | 中山書局 |
| 進学適性検査と高等学校進学案内 昭和29年度版 | 旺文社 | | | 1953 | 旺文社 |
| 大学入試進学適性検査の指針 昭和29年度 | 測定と指導の会 | | | 1953 | 白亜書房 |
| 進学適性検査の問題(村瀬隆二) | 依田新 | 教育心理学講座第5巻 | | 1953 | 金子書房 |
| 官・公・私立大学進学適性検査の研究と対策 | 桐村信雄 | | | 1953 | 広文館 |
| 進学適性検査の傾向と対策 昭和29年度版 | 根本峰好 | | | 1953 | 旺文社 |
| 進学適性検査の急所と秘訣 | 精神検査研究会 | | | 1953 | 三友書房 |
| 特集座談会 栄冠への道を語る | 出井貞男ほか | 学燈 | 6-6 | 1953.6 | 学燈社 |
| 進学適性検査問題の研究 | 編集部 | 学燈 | 6-9 | 1953.9 | 学燈社 |
| 特集 進学適性検査の対策と進学の問題 | 編集部 | 学燈 | 6-12 | 1953.12 | 学燈社 |
| 大学進学適性検査の是非 | 加藤地三 | 教育じほう | 74 | 1954.3 | 東京都新教育研究会 |
| 進学適性検査に就いて | | 社会人 | 62 | 1954.6 | 社会人社 |

表②：NDL Search における「進適」検索結果より、本研究で対象とした資料

| 記事・書籍タイトル | 編著者 | 掲載書籍・雑誌名 | 巻号 | 発行年月 | 発行所 |
|-------------------------------|----------|-------------|-------|---------|-------|
| アテープメント・テスト全科正解:全国高校進学 昭和26年度 | 旺文社 | | | 1951 | 旺文社 |
| 本年度進適の成績、面喰った今年の問題「進適受験記」 | | 学生 | 35-13 | 1951.4 | 研究社 |
| 進適受験の対策と問題の研究(一)、進適体験記 | | 受験と学生 | 36-1 | 1951.5 | 研究社 |
| 進適談義 | | 受験と学生 | 36-7 | 1951.11 | 研究社 |
| 進適受験直前の準備と心得、廿七年度進適追試験について | | 受験と学生 | 36-9 | 1952.1 | 研究社 |
| 進適試験場探訪、今年の進適後日譚、進適か・学力か・内心か | | 受験と学生 | 36-11 | 1952.3 | 研究社 |
| 進適突破対策 | | 受験と学生 | 37-1 | 1952.5 | 研究社 |
| 進適の扉:進適突破対策 | | 受験と学生 | 37-2 | 1952.6 | 研究社 |
| 進適の扉:進適突破対策 | | 受験と学生 | 37-3 | 1952.7 | 研究社 |
| 進適の扉:進適対策 | 藤羽多礼太 | 受験と学生 | 37-4 | 1952.8 | 研究社 |
| 座談会 高校生の生活と意見 | | 学燈 | 5-9 | 1952.9 | 学燈社 |
| 進適予想問題の研究(1) | | 受験と学生 | 37-5 | 1952.9 | 研究社 |
| 入試の第一難関進適は如何に行われるか | | 受験と学生 | 37-6 | 1952.10 | 研究社 |
| 進適はどの程度に評価されるか | | 学燈 | 5-12 | 1952.12 | 学燈社 |
| 進適受験の要領と注意 | | 受験と学生 | 37-8 | 1952.12 | 研究社 |
| 進適受験体験記、進適系列問題解き方のコツ | 山田幸二、戸田清 | 受験と学生 | 37-9 | 1953.1 | 研究社 |
| 私大の進適はどんな問題が出るか | 編集部 | 受験と学生 | 37-10 | 1953.2 | 研究社 |
| 程度がずっと高くなった:今年の進適講評 | | 受験と学生 | 37-11 | 1953.3 | 研究社 |
| 進適検査への疑問 | 新明正道 | 時事通信(時事解説版) | 2423 | 1953.11 | 時事通信社 |
| 進適検査場探訪記 | 編集部 | 学燈 | 7-1 | 1954.1 | 学燈社 |

表③：CiNii における「進学適性検査」「進適」検索結果より、本研究で対象とした資料

| 記事・書籍タイトル | 編著者 | 掲載書籍・雑誌名 | 巻号 | 発行年月 | 発行所 |
|------------------|---------------|----------|------|---------|----------|
| 進学適性検査の現状と課題 | 村瀬隆二 | 青年心理 | 1-4 | 1950.12 | 金子書房 |
| 進学適性検査について | 荒木直(文部省大学学術局) | 月刊教育調査 | 2-8 | 1951.2 | 文部省調査普及局 |
| 座談会 進学適性検査に対する批判 | 梅津八三ほか10名 | 数学教育 | 6-3 | 1952.7 | 日本数学教育学会 |
| 智能検査と進学適性検査 | 中村弘道 | 科学の実験 | 3-10 | 1952.10 | 共立出版 |
| 進学適性検査についての座談会 | 岡部彌太郎ほか21名 | 数学教育 | 7-5 | 1953.9 | 日本数学教育学会 |
| 進学適性検査の廃止とその問題点 | 碓井正久 | 教育 | 4-4 | 1954.4 | 国土社 |

徳山・斎藤、1961、pp.294-298)。

こうした経緯から、進適を「米国から押しつけられたもの」とみる認識が一部に存在していたことは確かである(同、pp.187-188)。実際、進適の導入にあたっては、文部省や旧制高等学校の教員たちが激しく反対したといわれている(中野、1990)。しかし、日本側でも、従前よりこの種の検査研究にあたってきた心理学研究者らは、進適の導入を積極的に支持していた。特にかれらは、終戦直後という特殊な社会状況に絡めて、進適を導入することの意義を主張していた。この点について、進適の問題作成に携わっていた西堀道雄は、次のように端的に述べている(西堀、1969、pp.60-61)。

敗戦当時の中等学校生徒は戦時中の勤労働員等によって永く学業から遠ざかっていた者が多く、また敗戦直後の不安定な社会的、経済的情勢のもとにあつて、学業に励みうる家庭的条件も不十分であり、それらの条件の個人差も極めて大であった。また学校における授業の態勢も不十分であり不揃いであった。そこでこのようなときに、従来の通りの入学試験での学科試験成績だけで高専校等への合否を決めるのは不合理である、当時は豊かな素質をもちながらも勉強の条件が整わなかったために学力が十分に身につかない者も多かったが、このような者でも条件さえ整えば十分に伸びうるはずである、そこでこのような者にも合格の機会を与えるために

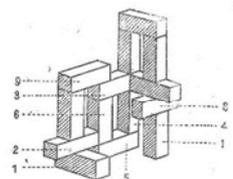
は、学科試験だけでなく、そのほかに素質の検査を行なうことが合理的である、と考えられた。

1947(昭和22)年度に「高級知能検査」として大学入試に導入された検査は、翌年以降「進学適性検査」と改称され、「一般的な知能」に加え「文科・理科の適性」を測定することを基本方針として1954(昭和29)年度まで継続実施された。国立学校および公・私立学校の一部の入試において用いられた文部省作成の検査問題は⁴、主として心理学研究者がその作成に携わった。検査は学科試験の数か月前に実施され、得点は受験生にも通知されたが、その得点を実際の合否判定においてどのように取り扱うかについて統一の方針は定められなかった。したがって、一科目分の得点として合算するケースや単なる「足切り」として使用するケースなど、その実態は学校ごとに区々であった(日本教育学会入試制度研究委員会(編)、1983、p.43)。

進適の検査内容についての詳述は紙幅の関係上避けるが、基本的には心理検査・知能検査の応用であり、問題の質としてそれほど難易度の高いものではなかった(参考資料①②)。ただし、検査

II

下の図は同形同大等しい直方体を並べ重ねてある所を書いたものである。各直方体はその一部はかならず見えており、また、あるものには数字がつけられている。この問題においてはこの組立てられたものの中から、あるきめられた1個または2個の直方体を、全体の組立てをくずさずしてしまわないで取出すためには、最少何個の直方体を取除かなければならないかを答えよ。ただし、どの直方体を取除くにもかならず上方に抱上げて取除き、側方へは置くことを許さないことにする。



(問)

- (1) 数字番号「7」の直方体を取出す場合
 - (イ) 3個 (ロ) 4個 (ハ) 5個 (ニ) 6個以上
- (2) 数字番号「5」の直方体を取出す場合
 - (イ) 3個以下 (ロ) 4個 (ハ) 5個 (ニ) 6個
- (3) 数字番号「2」と「3」の2個の直方体を取出す場合
 - (イ) 3個以下 (ロ) 4個 (ハ) 5個 (ニ) 6個以上

参考資料②

1948(昭和23)年度検査の「入学者選抜法の解説(二)」において示された例題II

(文部省大学学術局『進学適性検査結果報告第1分冊』1953年、附録p.83)

(問 題)

I

下の問題文ではその一部が欠けており、その欠けている所に(1)から(6)までの番号がつけられている。また問題文の下には各番号について(イ)から(ハ)の4通りの言葉が書いてある。そのうちから欠けている所を補うのにもっとも適切な言葉をひとつだけ選べ。

問題文

世の中のことは一瞬さきも分らないと言ひ慣はされ、料末のことは(1)ことは出来ない。(2) 太陽が西に沈むと、明朝は(3) 東から昇つて来ることを疑ふものがない。冬来りな(4)と、穠い日の来るのを(5)ある。

- | | | | | |
|--|--|---|--|--|
| (1) (イ) 誰も予測する (ロ) 何も分る (ハ) 人に告げる (ニ) 凡人は知る | (2) (イ) もし (ロ) 故に (ハ) しかし (ニ) 例へば | (3) (イ) すぐ (ロ) また (ハ) やがて (ニ) 自ら | (4) (イ) ただ来し (ロ) 春おそし (ハ) 春遠し (ニ) 春遠からじ | (5) (イ) 避けて (ロ) 見まもつて (ハ) 持つて (ニ) 棄つて |
|--|--|---|--|--|

参考資料①

1948(昭和23)年度検査の「入学者選抜法の解説(二)」において示された例題I

(文部省大学学術局『進学適性検査結果報告第1分冊』1953年、附録p.83)

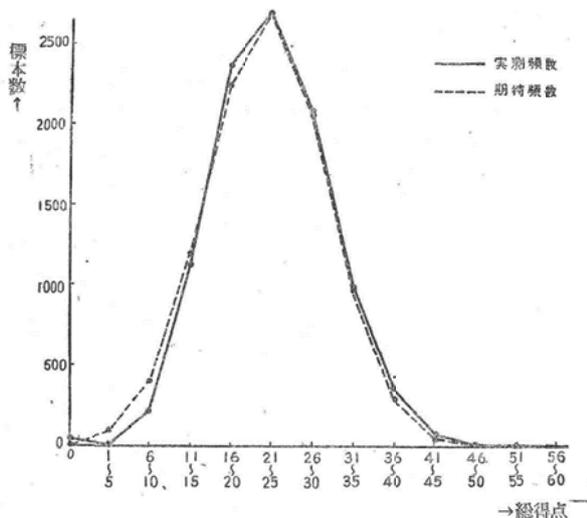
⁴ 私立学校では独自に検査問題を作成し実施してもよいとされていた。ただし、テスト作成上の困難などから、次第に文部省作成のテストを用いる学校が増加した(黒羽、2001、p.130)。

の構造上、検査結果は100点満点中40-50点前後に集中する正規分布に近似しており、80点以上の高得点を獲得することはさきわめて難しいものとなっていた(図①)。

2.2 進適の一斉実施廃止

進適に対する批判が強まり始めたのは、1952(昭和27)年頃からである。1953(昭和28)年に入ると議論はさらに活発化し、高等学校長協会から廃止の要望が出される一方、日本心理学会や日本応用心理学会が進適擁護の意見書を発表するなど、進適の是非が大学入試をめぐる最大の論点として焦点化されていった(増田・徳山・斎藤、1961, pp.107-108)。こうした動向をうけ、文部省では1954(昭和29)年1月に委員会(大学側6名、高校側5名、心理学者4名、学識経験者4名)を設置、3回の審議の結果、1955(昭和30)年度より進適の全国一斉実施を廃止し、実施は各大学の自由と決定した(中野、1990など)。その結果、1955年度に進適を実施したのは国際基督教大学のみとなり、多くの場合これをもって事実上の「廃止」と見なされている。

一斉実施の廃止が決定されるに至った要因については、論者によってさまざまな見解がみられる。しかし、大別すれば、①テスト作成および実施にかかるコスト面の問題、②テストの科学性・信頼



図①

1949(昭和24)年度進適結果調査における
標本の総得点分布

(文部省大学学術局『進学適性検査結果報告第2分冊』
1953年、p.52。なお、検査の満点は60点)

性に対する疑義、③受験生に対する負担の過大の3点にまとめることができる⁵。これらのうち、本研究の問題関心に照らして注目したいのは③の点である。この受験生に対する負担の過大とは具体的にどのようなことかという点について、前出の西堀(1969, p.66)は、当時みられた意見の内容を次のようにまとめている。

進学適性検査には準備や練習は無用であり無駄であるといわれているが、受験参考書は無数に出版され、大中都市では模擬試験が頻繁に行なわれていて、練習効果が大いにあるようである。そうだとすれば受検者はこれに無関心ではありえない。ところで各教科の受験勉強はそれによって実力を増して有益であり、また、ある程度まで努力すると一種の安心感が得られるものである。しかし、進学適性検査のような受験勉強は実質的には将来の何の役にも立たないし、いくらやっても自信がついたという気になれない。しかもこの勉強を精神的に強制されることは、精神衛生上極めてよろしくない。

このように、準備や練習の必要はないとされていたはずの進適に関して、実際は準備対策の参考書や模擬試験が多数登場し、結果として受験生の負担が増大したというのである。いったい、なぜこのような事態が発生したのであろうか。また、「いくらやっても自信がついたという気になれない」という記述からは、それらの「対策」にどの程度の効果があったのかも問題となる。

そこで次章では、進適得点上昇のための「練習効果」に関する言説の分析を通じて、これらの疑問を明らかにしていきたい。

3. 「練習効果」についての認識

3.1 「練習効果」に対する文部省および心理学研究者の認識

まず、文部省が「練習効果」についてどのような見解を示していたかを見ていくこととしよう。1948(昭和23)年度以降の検査において、文部省は進適受験にあたっての注意点をまとめた文書を

⁵ 廃止の要因について詳しくは、加藤地三(1954)、碓井正久(1954)、西堀道雄(1959, pp.405-406)、増田・徳山・斎藤(1961年, p.189)、西堀道雄(1966)、中野(1990)などを参照。

受験者に向けて配布していたが、そこには「練習効果」に関する記述がみられる。1948（昭和23）年度の「検査問題の形式および解説」には、「進学適性検査は、特殊な学科的知識や訓練を殆ど要求しないから、受験者は決して恐れたり、ためらったりする必要はない。又検査のために特別に準備練習をすることも無駄である」と記されている（文部省大学学術局、1948）。さらに、「練習をいくら重ねても、各人の能力以上に熟達することはできないばかりでなく、場合によつては、むしろ逆効果を来たし、検査場での実際の検査問題を解く際に誤つた考えに固執して、すなおに正しい解決を得ることができないことさえないとはいえない」と、練習を制止するような記述もみられる（同）。

こうした強い語調は翌1949（昭和24）年度のものになると幾分緩和され、「この検査のために特別に準備練習をしてもあまり効果はないことが知られている」と、「効果がないわけではない」ともとれるニュアンスに変わっている（文部省、1949）。1950（昭和25）年度のものもこれとほぼ同様であったが、1951（昭和26）年度になると再び「問題内容は常識で十分判断できるようなものであり、特別な学問的知識は不必要であり、また、準備や練習をしても効果はない」と、「練習効果」否定の色合いが濃くなっている（文部省、1951）。だが、1952（昭和27）年度以降になると、「練習効果」に関する直接的な記述はなくなっている。以上のように文部省としては、基本的には「練習効果」を認めないという姿勢を貫いていたとみてよいだろう。

これら文部省の見解とは、実際はテスト作成委員会の見解であり、したがってそれは心理学研究者の見解とほぼイコールで結ばれるものと考えてよい。ただし、実際の検査において「練習効果」が発生しうることに関し、心理学研究者らは限定的に認めていた節がある。たとえば、進適への批判が強まってきた1953（昭和28）年10月に出された「進学適性検査について考えられる非難とそれに対する進学適性検査問題作成委員会の所見」には、次のような記述がある。

一般に練習効果の程度は、練習する人の質によって甲乙あり、また練習されるものによってその効果が顕著にあらわれるものと然らざるものがある。素質という抽象的なものをそのまま測定することはできないから、知識的操作を通じてそれを測定しなければならない。従って、

その媒介となる知識・思考法に対しては多かれ少なかれ練習効果が認められるのか当然である。しかし、進学適性検査においてはそのような効果の少ないものを選んで問題が作られているから今日広く行われているように、ただ回数を重ねて練習しても必ずしも効果があるとは限らない。

「効果の少ないものを選んで」とあるように、心理学研究者らにとって、「練習効果」の発生は問題作成上の不備のあらわれとして認識されていた。日本大学で田中寛一から心理学の薫陶を受けた安藤公平（1948、p.40）も、「知能検査が練習効果があつて受験準備によつてねうちのないものになる、信頼のおけないものになるということは、問題の出し方の技術で、これは心理学者が研究して練習効果の現われないように作ればよいことなのである」と述べている。したがって、できる限り純粋に「素質」を測定すべきテストの作成に腐心していた心理学研究者らにとって、「練習効果」の発生は「研究不足」のあらわれとして受け取られたとしても無理はない。そのため、どちらかといえば「練習効果」に否定的なスタンスを採っていたと考えられよう。

また、心理学研究者らが「練習効果」を認めていたこと背景には、かれらの「素質」観も関係している。一般にこの言葉から連想されるイメージとは異なり、心理学研究者らは進学適性検査によって測定しようとする「素質」を、生得的要因と環境的要因とから構成されるものとして捉えていた。したがって、「一般に、適性という場合、何か固定的なものを予定しているきらいがあるが、それが誤りであるということ、したがって、適性検査を考える場合にも、きわめて重要な点であること」（続、1953、p.4）が指摘されていた。しかし、このような固定的な素質観が「知的能力に対して流布している俗説」（日本応用心理学会テスト調査部、1952、p.8）と評されていることから分かるように、心理学研究者らの「素質」観が必ずしも社会的理解を得られていたとは言いがたい。この点は、進適が何を測定するかについての社会的合意が形成されていなかったことの傍証といえよう。

3.2 受験雑誌・参考書における「練習効果」に対する認識

これまで見てきた文部省や心理学研究者らの認

識とは異なり、受験雑誌や参考書の記述においては、そのメディア的特性も相まって「練習効果」の存在が強調されていた。例えば、雑誌『螢雪時代』などですでに受験産業界での地位を確立していた旺文社が刊行した根本峰好（同社編集部長）『進学適性検査の傾向と対策 昭和28年版』（1952年）には、同社社長赤尾好夫による次のような「推薦のことば」が冒頭に掲載されている。

だが「適性検査」の実体はそれほど不気味なものでも怖るべきものでもないであろう。この問題も年と共に常識妥当なものになり、多くの学生が普通の常識をもち、一通りの用意さえしておけば、まず入試に差支えない程度の合格点はとれるからである。「準備しても効果がない」という言葉がこの不安の大きな原因でもあったようであるが、世の中に訓練して上達しないものがあつたらそれは奇蹟であり、平均点数が東京が最高点であることが、雄弁に実証しているのである。

いかにも受験業界らしい調子で、練習＝努力の意義が高らかに謳われているのがわかる。同様に、旧制中学校時代から長年にわたり教師を勤めてきた茂庭鉄夫（1952、p.26）も、「独り進学適性検査のみに限らず、いやしくも人間のやることに、練習効果のないものはないのであり、さればこそ、日常不断の努力というものが、人間の生活において高い価値をもっているのである。（中略）努力すればする程効果があるところにこそ、努力の意義と価値があるのであり、この点、進学適性検査といえども決して例外ではないのである」と述べている。これらの記述には、進適を努力主義の文脈に落とし込むことで、「素質」を測定しようとする検査の企て自体を無効化する意味合いがあつたといえる。実際、茂庭（同、p.25）は「現に各種各様の模擬試験が全国各地において行われており、あるいは又、各種各様の模擬試験問題が売り出されていて、しかもそれらが、立派に企業的に成立している事実を見れば、練習効果に対する世上一般の見解が、文部省当局のそれと如何に対立しているものであるかを如実に物語っているであろう」とも述べており、前節でみた文部省・心理学者らの見解を世間一般の認識に反するものと捉えていた。

では、受験産業の文脈で協調されていた「練習

効果」とは、具体的にどのようなものだったのか。それは、進適の得点を如実に上昇させるような性質のものだったのか。答えは否である。「練習効果」を強調するこれらのメディアにおいても、その効果は検査に対する「慣れ」や「心理的落ち着き」をもたらす程度のもので捉えられていた。

問題によつては明かに練習によつて点数の増すものがある。例えば原理的、基本的な能力に属するものは、その解答方法も容易な代りに練習による効果は余り目立たない。だが思考順序だとか、形式の風変りなもの、及び技巧を要するものなどには、とつつきが悪いだけに練習効果がはつきり現われる傾向がある。この一例を挙げれば、暗号文、積木、混乱文整理などは、日頃手がけておくと、解答形式が変化する位で材料は余りかわらないから練習しておけば、効果的である。あの手だなど関連が付き洞察が容易になるだけでも気が楽ではあるまいか。（東京新制大学進学指導委員会、1952、p.10）

文部省の発表では、「準備や練習をしても効果がない」とあるが、これも注意すべき点であろう。何となれば進学適性検査の形式は、本書の後にのべてあるような「客観的テスト形式」といわれるニュー・ルックであり、普通諸君が学校で普通やる試験とは、問題の出し方も、問題数も、答え方も大部ちがうのである。又、問題の内容も平常学校で教わっていることそのままではなくて大部目新しいものである。このように問題の形式も内容も目新しいものである以上、諸君はある程度その点を知っておかなければならない。（精神検査研究会、1952、p.6）

これらの記述からわかるように、進適はその形式上他の学科試験とは異質のものであり、それらに対する「慣れ」を養うことが「練習効果」の意味するところだったのである。進適を努力主義の文脈で語っていた前出の茂庭（1952、p.30）でさえ、「わが国においては今日なお、進学適性検査の形式や方法は一般化されていないから、一応の準備をして、それに対する心構えを作っておく必要がある。がしかし、あたかも学科試験の準備でもするような調子や方法で準備することは愚の骨頂である。（中略）進学適性検査の準備は、それが大体どのようなものであるかを心得る程度で十

分である」と述べていた。

実は、検査に対する「慣れ」は、「問題の練習や模擬試験から得られる効果は実質的な面より心理的な面で大きい。即ち、勉強した、馴れたという自信から得られる一種の安定感であろう」（日本応用心理学会テスト調査部、1952、p.99）というように、心理学研究者らが限定的に認めていた「練習効果」そのものでもあった⁶。ただ、心理学の立場からは、「このような効果は、はじめの三、四回だけであって、それ以後はほとんど向上しないものではないかと思う。受検者たちが「練習の効果があつた。」という場合でも、実際に果たして、どの程度得点を向上させ得たのかは、疑問であることが多い」（村瀬、1953、p.146）というように、「慣れ」は「練習効果」と呼ぶに値するほどのものではなく、前節で述べたように問題作成上の不備とする向きが強かった。それゆえ心理学研究者らは、あらかじめ見本問題を提示することによってこうした「慣れ」の効果を軽減すべきであると主張し（岡部、1948 など）、実際の進適においても 3-1 でみた受験者向け配布資料の中で例題が示されていた（文部省 1948、1949、1951 など）。

このように見てくると、心理学の文脈と受験産業の文脈での「練習効果」に対する認識の相違は、まさにこの「慣れ」をどう評価するのかという点における相違であったとってよい。実際のところ、進適得点を顕著に向上させるための「秘策」を提案することは、受験産業の側でも不可能に近く、「最後の勝利のカギはやはり諸君の平素の総合的な学力以外にはない」（学燈編集部、1951）「結局高校在学中に正規の課程をまじめに学習しておくことがなによりも大切だ」（無記名、1952）などと結論づけられることが多かった。

3.3 「練習効果」に対する受験生および高等学校側の認識

以上に見てきたように、その立場性の違いによって「練習効果はある」とも「ない」とも言われていたのが、当時の状況である。こうした状況に最も翻弄されたのが当の受験生だったのであることは、想像に難くない。では、彼・彼女らは実際のところ「練習効果」をどのように捉えていたのだろうか。結論から言えば、受験生の認識とし

て「練習効果」を積極的に肯定するものはほとんど見られなかった⁷。多くの場合、進適に対する練習・準備は、期待するほどの効果を挙げないものとして捉えられていたのである。

今度の試験をうけて感じたことは進適の準備はそれ程役に立たないということだ。僕は傾向と対策を勉学の余暇に手にとったり、二、三の模擬試験をうけただけだからそんなに無駄とは思わなかったが、進適の準備に夢中だった友達も居るが、結果はどうだったものだろうか。（無記名、1951）

模擬試験を二、三回受けてあがるくせのあるのを防げば「傾向と対策」を買わなくてもよいと思います。過去の問題を二月も三月もかかって勉強しても何の効果もありません。このことを特に痛感しました。今後は参考書はあまり出版されなくなるでしょう。雑誌に毎号掲載される進適の研究を一通りみておけば大丈夫だと思います。（山田、1953）

ほかにも、「模試は度胸をつけるにはいいと思います」「大して効果があるとは考えられません、進適にはどんな問題が出され、どのような形式で答えるものかといったことを知つて心構えをつくつておくことは必要でしょうね」「問題練習はやらぬよりはやつた方が良いでしょう」など、受験生の意見では効果の限定性を表明するものがその多くを占めていた⁸。また、後年の回顧として、当時受験生であった教育学者の寺崎昌男も「進適は易しいけど準備のしようもない、というのが、私たちの常識だった。大手の受験出版社からは『進学適性検査の傾向と対策』といった問題集が出ていたが、そういうのをやっても、さっぱり安心できない」と述懐している（寺崎、1978）。

ただ、注意したいのは、このような認識がすぐに進適反対・廃止に結びつくわけではないということである。「進適という制度は不要だ」という声が僕らの友人達の間でも相当強いのですが、私個人としては特に意見は持つておりません⁹（無

⁶ほかに心理学研究者による同様の見解としては、中村（1952、p.100）などを参照。

⁷数少ない例としては、東京新制大学進学指導委員会（1952、p.51）における東京教育大学受験生 O 生の意見。

⁸学燈編集部（1952）より、唐津康夫（東京大学文二）・山中恒子（お茶の水女大）・宮上周正（広島大学）の意見。

⁹芝高校より東大へ入学した者の談。

記名、1953) という受験生の意見もみられるし、やはり当時受験生として進適に相対していた教育学者の中野光も、進適の検査としての妥当性については疑問を持ちつつも「それぞれの学校の特殊な事情が考慮されず、受験勉強も要しない、というのなら『それもよからう』というのが当時の私の受けとめ方だったように思う」(中野、1990、p.7) としている。

むしろ注目すべきなのは、受験生の負担過大を理由とした進適廃止論が、結果的には「練習効果」を最も積極的に肯定するロジックを伴っていたという点である。象徴的なものとして、1953(昭和28)年12月に文部大臣あてに提出された全国高等学校長協会の「大学進学適性検査を廃せられたき件(要望書)」の記述を紹介したい¹⁰。ここでは、進適を廃止すべき理由5点の一つとして、次のような主張がみられる。

準備や練習をしても効果がないという文部省の見解であるが、ここ数年来の高校側の経験は、数回の事前練習によってその成績が極めて顕著に向上するものであることを示している。練習の効果があるということは、先天的素質よりも習得知識の力が進適でものをいうことの証左であろう。

進適廃止を求める文脈においてこうしたロジックが存在していた以上、進適反対論は必ずしも進適の「反・努力主義」的性格をその理由としていたわけではなかったといえる。進適の評価をめぐる事態は、先行研究が指摘したような「素質か努力か」の二項対立には回収しきれない、より錯綜的な様相を呈していたのである。

4. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、執筆者・発言者の立場性の違いを分析軸として、進適の「練習効果」に関する言説を読み解いてきた。今一度、得られた知見を整理しておきたい。

文部省・心理学研究者らは、「練習効果」の存

在を基本的には認めないスタンスを採っていた。「練習効果」はテスト作成上の不備のあらわれであり、その効果を軽減するためにテストの見本を提示することさえしていた。そこには、可能な限り「素質」の正確な測定を目指そうとする意図を読み取ることができる。一方、受験産業の文脈では「練習効果」の存在が強調され、進適得点は努力次第で向上可能なものとして捉えられていた。ただし、そこで「効果」とされていたのは「慣れ」「落ちつき」といった程度のものであり、その内実は心理学研究者らのいうテスト上の不備と重なるものであったといえる。さらに、こうした「練習効果」の有無に最も神経を尖らせていた受験生にとっては、その効果はあまり目覚ましいものとは認識されていなかった。むしろ、進適廃止を唱道する高校側の主張の中に、最も明確に「練習効果」の大きさを認めるロジックが存在していたのである。

このように、「練習効果」の存在を是とする意見も否とする意見も、そのどちらもが進適廃止論に接合しうるものであった。先行研究では、努力主義と進適廃止論はストレートに結びつくものとして捉えられていたが、練習＝努力と進適廃止との関係性はそれほど単純なものではない。では、結局のところ進適と努力との関係はどうかという疑問が残されているが、この点の解明は本研究の範囲を超える。ただ、一つの仮説的見解として、「実際に努力の余地があるか否か」ではなく「努力の成果を実感できるか否か」という点に着目する方向が考えられる。この問題の解明にあたっては、テストとしての進適の技術・設計上の問題にも照準する必要があるだろう。今後はこうした問題の解明を通して、進適をめぐる起きた事象の社会的・歴史的意味、そしてその背後に潜む日本社会の能力の捉え方を追究していきたいと考えている。

<文献>

- 安藤公平(1948). 進学適性検査の解説 旺文社.
 学燈編集部(1951). 進学適性検査問題の考究 学燈, 4(10), 103-106.
 学燈編集部(1952). 特集 進学適性検査の直前対策 誌上座談会 学燈, 5(12), 16-21.
 石岡学(2014). 1920年代日本の中等学校入試改革論議における「抽籤」論にみる選抜の公正性 教育社会学研究, 94, 173-193.
 加藤地三(1954). 大学進学適性検査の是非 教育じ

¹⁰「大学進学適性検査を廃せられたき件(要望書)」(1953年12月1日、全国高等学校長協会総合制部会理事長京都市立伏見高等学校長奥谷久彦、文部大臣大達茂雄あて)(増田・徳山・斎藤、1961、pp.326-328)。

- ほう, 74, 13-15.
- 木村拓也(2014). 大学入試の歴史と展望 繁榊算男(編著) 新しい時代の大学入試, 金子書房, 1-35.
- 国立教育研究所(1960). 大学適性検査の妥当性の研究(国立教育研究所紀要第20集).
- 腰越滋(1993). 進学適性検査の廃止と日本人の階層組織化の規範 教育社会学研究, 52, 178-207.
- 腰越滋(1996). SAT (Scholastic Aptitude Test) と進学適性検査の比較社会学 武蔵野短期大学研究紀要, 10, 35-43.
- 黒羽亮一(2001). 新版・戦後大学政策の展開 玉川大学出版部.
- 増田幸一・徳山正人・斎藤寛治郎(1961). 入学試験制度史研究 東洋館出版社.
- 文部省(1948). 昭和23年度高等専門学校入学者選抜方法の解説(二). (ただし原本入手困難のため、文部省大学学術局『進学適性検査結果報告第1分冊』(1953年)附録p.81に依拠)
- 文部省(1949). 昭和24年度新制大学および旧制専門学校等進学適性検査の手引. (ただし原本入手困難のため、文部省大学学術局『進学適性検査結果報告第2分冊』(1953年)附録p.20に依拠)
- 文部省(1951). 昭和26年度新制大学短期大学および旧制専門学校等進学適性検査の解説. (ただし原本入手困難のため、文部省大学学術局『進学適性検査結果報告第3分冊』(1955年)附録p.25に依拠)
- 茂庭鉄夫(1952). 大学受験適性検査 岩崎書店.
- 無記名(1951). 進適体験記 面喰った今年の問題学生, 35(13), 86-87.
- 無記名(1952). 入試の第一難関 進学適性検査は如何に行われるか 受験と学生, 37(6), 8-9.
- 無記名(1953). 特集座談会 栄冠への道を語る 主要大学合格者による 学燈, 6(6), 32-41.
- 村瀬隆二(1953). 進学適性検査の問題 阪本一郎(編) 現代心理学講座第5巻教育評価と測定 金子書房, 127-159.
- 中村弘道(1952). 高校受験のための進学適性検査 白亜書房.
- 中野光(1990). 進学適性検査(進適)とは何であったか 進学適性検査結果報告全4巻(復刻版) 大空社, 1-14.
- 根岸峰好(1952). 進学適性検査の傾向と対策 昭和28年版 旺文社.
- 日本応用心理学会テスト調査部(1952). 進学適性検査の要領 白亜書房.
- 日本教育学会入試制度研究委員会(編)(1983). 大学入試制度の教育学的研究 東京大学出版会.
- 西堀道雄(1959). 進学テスト 南博(編) 応用社会心理学講座第2巻調査方法 光文社, 394-410.
- 西堀道雄(1966). 進学適性検査がはかったもの 科学朝日, 26(6), 98-101.
- 西堀道雄(1969). 進学適性検査の妥当性 牛島義友(編) 講座教育評価第5 明治図書出版, 58-78.
- 岡部彌太郎(1948). アメリカにおけるカレッジ入学試験の知能検査 文部時報, 845, 6-9.
- 佐々木享(1989). 進学適性検査の廃止と二次試験方式の登場 大学進学研究, 11(2), 55-59.
- 精神検査研究会(1952). 進学適性検査の急所と秘訣 三友書房.
- 竹内洋(1988). 選抜社会 リクルート出版.
- 寺崎昌男(1978). 「進適」の思い出 文藝春秋, 56(5), 81-82.
- 東京新制大学進学指導委員会(1952). 大学入試進適問題解剖 山文社.
- 続有恒(1953). 進学適性検査 日本応用心理学会(編) 心理学講座第9巻 中山書店.
- 碓井正久(1954). 進学適性検査の廃止とその問題点 教育, 4(4), 6-8.
- 山田幸二(1953). 進適体験記 半分出来れば大丈夫 受験と学生, 37(9), 16-17.